

女誠俚言

完



仰しく大家の志は賜へ皇國なりとも女倫居
 たる名しきも——もあはれを女誠乃るまじきなり
 志しき——も假名よきなり（さし）にあらう久
 新ある——もたよるまじき念切なり
 とも安く教訓たるなり——もまじきなり
 なるまじきなり——もまじきなり（さし）にあらう
 中（さし）にあらう（さし）にあらう（さし）にあらう
 か（さし）にあらう（さし）にあらう（さし）にあらう
 う——もまじきなり（さし）にあらう（さし）にあらう
 なるまじきなり——もまじきなり（さし）にあらう

仰しくも——もまじきなり（さし）にあらう
 皇國の政教なり（さし）にあらう（さし）にあらう
 志しきなり（さし）にあらう（さし）にあらう
 六（さし）にあらう（さし）にあらう（さし）にあらう
 け（さし）にあらう（さし）にあらう（さし）にあらう
 なるまじきなり——もまじきなり（さし）にあらう

永永六年——九月

清水福光識



女誠

女誠といふをんかのいふめけをく

明治十四年九月
本校出版部氏贈

後漢書列女傳曰扶風曹世叔妻者同郡班彪之女
也名昭字惠班一名姬作女誠七篇有助内訓其辭

昔漢土後の漢といふ代に扶風といふ所の曹世叔といふ人の

妻も同郡の班彪といふ人の娘で名は昭字は惠班といふ

又の名は班姬ともいひあり女誠といふ女の書に七箇條

を作りたる女の子を訓導するものなり其辭

はまを見く知るべし

鄙人愚暗受性不敏蒙先君之餘寵賴母師之典訓

女誠
女誠といふをんかのいふめけをく
後漢書列女傳曰扶風曹世叔妻者同郡班彪之女
也名昭字惠班一名姬作女誠七篇有助内訓其辭
昔漢土後の漢といふ代に扶風といふ所の曹世叔といふ人の
妻も同郡の班彪といふ人の娘で名は昭字は惠班といふ
又の名は班姬ともいひあり女誠といふ女の書に七箇條
を作りたる女の子を訓導するものなり其辭
はまを見く知るべし
鄙人愚暗受性不敏蒙先君之餘寵賴母師之典訓

の内よりて若勞をさるる妻が永に歲月ありて今づて死に程
もあらずまて父母はむふなり父族母属の親族たるの如き小
の事をも仕出さば死なれど若勞をやりのれぬものなり
知るを扱ふは自分の生れつゝもとり物毎に氣をたげやうと
頑て道理を辨へ故小にも等を教へ仕つけ育むる行
届ぬふ常々曹成字子穀といふもこの上の侍奉公すむ
若道ふちむるま有く此けつやめさるる侍代の瑕あり
事もむすむせむとあむ思居る所君の御恵小存もあは
格別ふ召はれ其上重に信し仰せも金紫とて上をなれ
東あといふ身分あり餘りも過てまづいふるは自分ち

どうにかやふありてと願望を屬へし形意の外は事と
おそれて居るもさるる男は自身も幼年より道理の教も
うけて居るまゆ心をはげ身成つてみへるけ筋違はさ
むのあきやふいふに有る程自分もまづこのみ業もせぬ
唯苦勞ふあり心をいも娘も事づき嫁入て人の家にお
ふ縁ありぬ身やうも平日は仕うとぬふより理道のをへつ
物が自然で身ふまみも居る女は身やうもせ縁ありぬ昔
より定めてはる禮法をも聞てぬやえ若や女の常々身のま
又所作を人の家へ通して仕持あるむを遠かしの出
是は畢竟親兄弟の仕持のわろき故と里方け父母親属の恥

ある事、いん、とある、おもしろい、今度の疾、沈滞、
なり、ぬ、壽命、なり、知る、か、おもしろい、常の無、
ぬれ、死、も、知る、夫、故、なり、其、通、行、通、ぬ、思、ふ、
度、心、を、ある、事、なり、ゆ、ら、ふ、ふ、の、頃、女、誠、と、め、い、
ある、七、箇、條、成、作、なり、願、望、も、なり、達、路、ふ、
女、誠、を、一通、に、寫、なり、此、通、ふ、む、け、よ、面、の、身、は、為、
き、ある、事、なり、ある、事、なり、ある、事、なり、成、成、
ある、事、なり、女、誠、の、を、守、り、少、く、も、油、斷、あ、け、ふ、つ、と、
ふ、ふ、と、なり

卑弱第一 卑といふやきや

古者生女三日卧之牀下弄之瓦墼而齋告焉卧之
牀下明其卑弱主下人也弄之瓦墼明其習勞主執
勤也齋告先君明當主繼祭祀也三者蓋女人之常
道禮法之典教矣謙讓恭敬先人後己有善莫名有
惡莫辯忍辱含垢常若畏懼是謂卑弱下人也晚寢
早作勿憚夙夜執務私事不辭劇易所作必成手迹
整理是謂執勤也正色端操以事夫主清靜自守無
好戲笑絮絮酒食以供祖宗是謂繼祭祀也三者苟
備而患名稱之不聞黜辱之在身末之見也三者苟
失之何名稱之可聞黜辱之可遠哉

夫婦第二 夫と人をいふと婦と

夫婦之道參配陰陽通達神明信天地之弘義人倫之大節也是以禮貴男女之際詩著關雎之義由斯言之不可不重也夫不賢則無以御婦婦不賢則無以事夫夫不御婦則威儀廢缺婦不事夫則義理墮闕方斯二者其用一也察今之君子徒知妻婦之不可不御威儀之不可不整故訓其男檢以書傳殊不知夫主之不可不事禮義之不可不存也但教男而不教女不亦蔽於彼此之數乎禮八歲始教之書十五而至於學矣獨不可依此爲則哉

夫婦乃中合之事也昔者定一之道理といふもの有り其道ハ天地陰陽二のの理と云はれありまじり配列を以て自然の理と男女とも陰陽ともを別あはれ一つもの夫故に天地人三才ともいひて神明のまじりあはれ微妙といふも云ふ目にも見えぬ奇妙不思議乃天地の道中通一なり一ハあり分るが夫婦の道といふもの天地陰陽の道理まじりあはれ人間ふりて出づる根本の處とて人間第一の大節大かゝる五倫といふ五品の倫のありとて父子君臣長幼朋友は四のれ者も皆この夫婦よりいひて出づる此故に禮といふと存て世の中

事毎小程にけ目^めを定めて有^あ法式作法^{ほうしきさくは}乃内^{うち}も男女^{なんにょ}のついでをまじり第一^{だいいち}に筋道^{すぢみち}の遠^{ちひ}ぬやういふ事を重^{おも}く貴^{たか}ぶ大切^{たいせつ}なりとあり詩經^{しきやう}といふ書^{あや}のにもあつ周^あ文王^{ぶんまう}の詩^し夫婦^{ふうふ}の睦^{むつ}も正^{ただ}しくみづからいふにけり徳義^{とくぎ}を睦^{むつ}鳩^{きう}といふ鳥^{とり}乃^{なり}松子^{しょうし}ふあざらへて殊^{こと}重^{おも}くあつ美^けく有^あるやふ昔^{むかし}より書^{あや}つて云^いはれて有^ある事^{こと}も今^{いま}一量^{いちりやう}見^みるやうにけりて形^{かたち}主婦^{しゆふ}の中^{うち}合^{あひ}のまへ目^めも見^みえぬ内^{うち}にあらやうと中^{うち}にけりて形^{かたち}此^{こゝ}もかくあれ明^{あき}く小^こ廣^{ひろ}く重^{おも}く天地^{てんち}と同^{おな}く道理^{だうり}あるは大切^{たいせつ}なりみ守^{まも}る所^{ところ}なりぬ事^{こと}も若^し夫^そが賢^{けん}なりて理道^{りだう}の辨^{はん}

より義理^{ぎり}中^{うち}暗^{くら}く其身^{そのみ}乃^{なり}行^い正^{ただ}かられ御^ごとて馬^{うま}御^ご忠^{ちゆう}下^{した}手^て其^{その}道^{みち}を以^{もつ}て我^{われ}心^{こゝろ}のまゝ小^こ馬^{うま}を御^ごふるはあぬやう小^こ妻^{つま}を自分^{おのれ}に徳^{とく}我^{われ}中^{うち}にけりて吾^{われ}心^{こゝろ}の依^より御^ごはさる事^{こと}もあつ又^{また}書^{あや}もあつて筋道^{すぢみち}訓^{くん}をまじり道理^{だうり}ふけきバ夫^そ小^こ事^{こと}をまじりぬゆゑ家内^{かうち}を治^ちるふとてまじり扱^{さく}夫^そが妻^{つま}を我^{われ}行^いふすぢにけりぬやうあつては安^{やす}んずる事^{こと}もあつ礼^{れい}を妻^{つま}小^こ目^めにけりて威儀^{ゐぎ}とて自然^{ぜん}に天^{てん}のおとく尊^{たう}にけりて極^{ごく}子^しけりてのまじり正^{ただ}しく形^{かたち}もあつ其^{その}位^ゐ程^{ほど}もあつ事^{こと}毎^{ごと}に身^みにけりて正^{ただ}しく礼^{れい}をまじり威光^{ゐかう}を極^{ごく}子^しも遠^{ちひ}くぬれ缺^{けつ}く役^{やく}ふたけりて妻^{つま}夫^そのほかにけりて心^{こゝろ}をまじりて

すれ鹿鳴我儀不咸行て夫を敬ひかづき信ふ事あると
女義理とかやうせ給はぬと定めて何れもこの理道
に隨てある欠くところあるが一解此二川の道は天地
陰陽の道理であること一は其道も同じ事
て其つむが二川物を今世とてよき人といふも君子たちの
子を教ふ仕方をばよくと考へて見ふ事妻を承徳する
るは後にはいふまに威光ありて松子のふくことある
ばあぬといふ事をば皆よく心得て居らふより男の子を幼
き時より讀書を習ふを昔より書籍は書である聖人賢人
たちの身に行ふかやうせ給はぬといふ譯を習ひ覚えん

きども男女とも同じ天地自然の道理なり女もまた夫小波の
て身に行ふ禮義といふ物あるをあるとあはれを覚え
るは人のあはれを氣が分る男子より教へ女子を
あらふ打給て教ぬ元來男と女といふは理ある男は教へ
女は教ふが及ぬといふはそれあるを彼と是と成二川あり
取あつてやうおぼえある處乃有りて道理のわぬは方々
にあらうされ古昔より禮法は男は子に八歳あるとて
讀書を習はせしむる形とそれと學問所へはのちて
身の行む方を學ぶといひて有る是は男の子に及ぶより
はちく女の子とて此教法なき時より教給はぬ事

敬慎第三 敬慎二字ともふ

陰陽殊性男女異行陽以剛爲德陰以柔爲用男以
彊爲貴女以弱爲美故鄙諺有云生男如狼猶恐其
噬生女如鼠猶恐其彪然則修身莫若敬避彊莫若
順故曰敬順之道婦人之大禮也夫敬非它持久之
謂也夫順非它寬裕之謂也持久者知止足也寬裕
者尚恭下也夫婦之好終身不離房室周旋遂生嫖
黷媒黷既生語言過矣語言既過縱恣必作縱恣既
作則侮夫之心生矣此由於不知止足者也夫事有
曲直言有是非直者不能不爭曲者不能不訟訟爭

既施則有忿怒之事矣此由於不尚恭下者也侮夫
不節謹呵從之忿怒不止楚撻從之夫爲夫婦者義
以和親恩以好合楚撻既行何義之存謹呵既宣何
恩之有恩義俱廢夫婦離矣

前中もいふ陰と陽と天地二川の氣と元來二川の氣と
時ぬもの形と二つの持あはらとおもくとかういふものをいふ
天地二川の氣の性を受得て生る人間故陰と女陽と男と
男と女と性も心も身の形も裏表の違ひあり其
譯ハ陽ハ表ハ道也ハ心も明ハ手強キ處を以テ陽の
子徳とハ又陰ハ裏の道とハ心も弱キ處を以テ

陰のよきと云ふは道と云ふ其天地陰陽其性を其体不
受得て生る人間をきく男陽の徳乃と云ふ明ふは強
を以て第と云ふ女陰乃徳忠あり不弱と云ふ我以
てと云ふ美る事と云ふ世間と云ふ此世の男
の子をもちて生るは狼のやに猛烈と云ふ此世の
弱くは弱きと云ふ女の子をもちて生るは鼠のやに
よくねどくといふざるやなれども強きと云ふ氣を
よくふことと云ふ有るは女乃身を脩め道を行むと云ふ敬
と云ふ清く物事をせしむる麗潔と云ふ大切と云ふ
よき道と云ふ又夫乃陽の徳乃強きと云ふ添ひ従ふ

順と云ふは心も身もふさかぬと云ふはくふまはるくよき仕
事と云ふ陰の風雪のほくも柳枝の折ぬやうなるものぞ
夫ゆへに古昔より書籍も敬と云ふやうな順と云
ふかめと云ふ二の道の女乃身を行むこの禮と云ふ物
乃ちよき第一の徳目ありといふやうに其敬と云ふ
別の事と云ふ我身を正しと云ふ持と云ふよく
もち年と云ふ油と云ふ心と云ふ心と云ふ心と云ふ心
云と云ふ又順と云ふ女乃けと云ふ寛裕と云ふゆるやに
せと云ふと云ふのむと云ふと云ふ物と云ふと云ふの
と云ふ持と云ふと云ふ足の踏留所と云ふ場所を知り

夫よりハけつして外へおぬやふ踏占て居ると寛裕はんめとの
寧ろ遠身を法にみんを雇うぐる恭下とわがよの事とま
を尚むむづるを第一夫婦の好意のみハ生涯離るゝ
事のあきものよくつく一家のうちでも勝手向の室又ハ
閨房などの何れあるもたゞ事を以て辱めさすり平常馴
あてみる居るあき敬みれば心はほいとおぼしきなり
然れどもあれ何あざりけれみざるがくも事をせむの出来
てうや海へ心づかうもある既にお屋敷を建てたるくみずかハ
しそい交の出舞のとこいうちうちのもの言過あや海の事があ来
るものなる時々我もふ心のやひもなるがたをおひく

の心や〜と云ふやちのふの第一は瑕めたるや
家乃治ぬ基あるは猶更其やか事い言多で併令
吾身が道理あれども身勝手小関えて用らざるまの
りて理乃にむれ情令けたる種ねれ嫌更憎む〜と云ふ
ふめつ恭下と云ふ身を憎み辱る〜と云ふ夫を〜と云ふ
事〜と云ふ心づけ届ぬよるを扱主を侮るやがたるも
く度の時々夫を腹立せぬ呵あ〜と云ふあるはあ〜と云ふ
も様々互に怒り罰めけ言はの時々まをせむもね更
に〜と云ふ妻成むらうと云ふ〜と云ふあ〜と云ふ一軒夫婦といふ
そのいもと他人あ〜義と云ふ男女の正〜と云ふあ〜と云ふ中

小和〜と云ふ奥底あれや〜と云ふ有て親〜と云ふ恩と云ふ
い〜と云ふ情は好と云ふ互に〜と云ふ〜と云ふ睦令て居
るものあるに打た〜と云ふあ〜と云ふ何の義理〜と云ふ
が有るも互め〜と云ふ罵〜と云ふ時ハ恩愛の心は情〜と云ふ
もね〜と云ふ恩と云ふ義と云ふ二のが昔〜と云ふあ〜と云ふ夫婦乃情
合離〜と云ふ是畢竟女乃のけけ〜と云ふみけ〜と云ふ夫を〜と云ふ
ひか〜と云ふ事の出来ぬ故あり〜と云ふ恥忍を慎む〜と云ふ
婦行第四 婦行と云ふ女の身〜と云ふ
女有四行一曰婦徳二曰婦言三曰婦容四曰婦功
夫云婦徳不必才明絶異也婦言不必辯口利辭也

婦容不必顔色美麗也婦功不必功巧過人也清閑
貞靜守節整齊行已有耻動靜有法是謂婦德擇辭
而說不道惡語時然後言不厭於人是謂婦言盥浣
塵穢服飾鮮潔沐浴以時身不垢辱是謂婦容專心
紡績不好戲笑絜齊酒食以奉賓客是謂婦功此四
者女人之大德而不可乏之者也然爲之甚易唯在
存心耳古人有言仁遠乎哉我欲仁而仁斯至矣此
之謂也

周禮云書女之身以必行爲婦道四つありと書
てある其一の婦徳と云ふは心のよきことなり是事二は

婦言と云ふ女のその言の口はきやうのり云々婦容と云ふの
を云ふは事四に婦功と云ふは手少くもは仕業は多あり
叔第一の婦徳と云ふは智慧發明多く人小勝色多あり
く凡人は氣の清くかゝる事乃あるをいふなり其次の
婦言と云ふは口はきやう辯舌勝るを云ふなり面白く言
ふを云ふなり又其次は婦容と云ふは顔のよきことなり
功と云ふは手少くもは縫針などの人を超て器用なく庸人乃
は種々あり思ふは女は女なりと云ふ事なりを云ふなり
清閑と云ふ心の中へ我儘氣隨慾心なく少くもわづらひなき

氣をばけ客人を有る時勝手此をばけ之をばけふも客
をばけ女は仕業の事なく婦功とふものぞ此四の事はい
女の身の中の大徳とて随一ふも事あるふて少くもふも
十分小澤山有るは物あり其より何よりもけつかな四の事ある
も奇妙不思議とて是をばけふも事あるふて少くもふも
いふ唯心を存するひく日夜朝暮少くもゆん那く我
慾心情弱るものぬきふ心を用ふるふも事あるふて少くもふも
昔孔子より聖人けふも仁とふ人の身か此ふも
起るもすち合慈愛とて物を憐みけふも徳とて萬
物を養ふもてふも天地とて一ひふも程のけつかな

か道也とてその外むかふも事あるふて少くもふも
み願ひても容易なり入るも事あるふて少くもふも
さうもそのひくふも素人間の身なり天地より受得
るものなり有る理ありてふも事あるふて少くもふも
一求むば直ふ仁とてふも事あるふて少くもふも
事とて眞實に行んと思ふも事あるふて少くもふも
ふも出するも事あるふて少くもふも
専心第五 専心といふ心を専一途に
禮夫有る再娶之義婦無二適之文故曰夫者天也天
固不可逃夫固不可離也行違神祇天則罰之禮義

有^レ愆^レ夫^レ則^レ薄^レ之^レ故^レ女^レ憲^レ曰^レ得^レ意^レ一^レ人^レ是^レ謂^レ永^レ畢^レ失^レ意^レ
一^レ人^レ是^レ謂^レ永^レ訖^レ由^レ斯^レ言^レ之^レ夫^レ不^レ可^レ不^レ求^レ其^レ心^レ然^レ所^レ求^レ
者^レ亦^レ非^レ謂^レ佞^レ媚^レ苟^レ親^レ也^レ固^レ莫^レ若^レ專^レ心^レ正^レ色^レ禮^レ義^レ居^レ絜^レ
耳^レ無^レ塗^レ聽^レ目^レ無^レ邪^レ視^レ出^レ無^レ冶^レ容^レ入^レ無^レ廢^レ飾^レ無^レ聚^レ會^レ群^レ
輩^レ無^レ看^レ視^レ門^レ戶^レ此^レ則^レ謂^レ專^レ心^レ正^レ色^レ矣^レ若^レ夫^レ動^レ靜^レ輕^レ脫^レ
視^レ聽^レ陟^レ輪^レ入^レ則^レ亂^レ髮^レ壞^レ形^レ出^レ則^レ窈^レ窕^レ作^レ態^レ說^レ所^レ不^レ當^レ
道^レ觀^レ所^レ不^レ當^レ視^レ此^レ謂^レ不^レ能^レ專^レ心^レ正^レ色^レ矣^レ
昔^レ者^レ定^レりて何^レ禮^レ法^レの書^レをのめ夫^レ二^レ度^レ目^レは妻^レをのめ
義^レ乃^レ有^レる事^レありて何^レ婦^レに二^レ度^レ嫁^レ入^レる事^レありて何^レ文^レ
面^レなるま故^レ夫^レ妻^レは天^レなりといひて何^レ我^レ其^レ譯^レ天^レなり

このハ覆^レふ事^レをのめりて何^レ地^レ乃^レよめ住^レむ程^レの事^レなりハ
天^レを離^レれぬ事^レなりといひて何^レ天^レの事^レなりといひて何^レ天^レを
何^レハ此^レの事^レなりといひて何^レ天^レの事^レなりといひて何^レ天^レを
夫^レの事^レなりといひて何^レ天^レの事^レなりといひて何^レ天^レを
天^レを離^レれぬ事^レなりといひて何^レ天^レの事^レなりといひて何^レ天^レを
地^レ乃^レ祇^レけいけいなり私^レにあら正直^レ道理^レなりみちふ背^レきぬ
やと云^レ天^レの罰^レなりと云^レ天^レの罰^レなりと云^レ天^レの罰^レなりと云^レ天^レの罰^レなり
つげて作法^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなり
をいつて云^レまかぬハ愛^レ想^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなり
さう云^レまかぬハ往^レ昔^レより女^レの教^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなりと云^レ敬^レいふ事^レなり

あがれどもせんかたがた故心配るものぞ人々嫌疑を
避のるるふけ用ゐるも諸又何を門戸窓をどうと
外を通る人を透見のぞき見る彼是より思のうを評判
那をすまはせ心一途をもち専小持くものも外へ
まも心も顔色も中々少くも由のみ海へぬいすのぞまふ引
起起居うはいと輕くふ埒もあく物毎疎畧めて又可く
事小直め氣がちつゝ家の内より部屋をどうと髪化粧衣服をも
取りてあきあきあく身を持て他へ出る或まゝ人の前へ
と出ると俄に化粧をとり流し花屋ふばくを志すか
ちを人に見えと思はるるをどうと用ゐる粧ひどうと又この

さう方もどうと世間の噂をもち或は女言海へき事なれ
まもあく男の美惡をどうと批判是ハ見まゝまゝなりと
け遠慮せんかたがた外へ人を透見のぞき見るかたがた身持を
心を専め色正しくまゝ事なれ出まぬといふ

曲從第六 曲とまがら從といふことありて理

夫得意一人是爲永畢失意一人是謂永訖欲人定
志專心之言也舅姑之心豈當可失哉物有以恩自
離者亦有以義自破者也夫雖云愛舅姑云非此所
謂以義自破者也然則舅姑之心奈何固莫尚於曲
從矣姑云不爾而是固宜從令姑云爾而非猶宜順

命勿得違戾是非爭分曲直此則所謂曲從矣故女
憲曰婦如影響焉不可賞

前も言ふく女ハ一生の中ハ一人の夫乃外身成すも人の
あるもの形れ一人はなほ心に協む睦けは是ガ女の一生の
あつたをさへりといふものぞ若又一人は意めらるる追ひられ
夫切て再外ハ人け家め嫁娶といふ事志那もこの故も
や女の一生ハ廢きて永くをさるる事ぞ斯いして有る女ハ
知るせむがなぬと禮義のすぢ道母吾志を平く定て外
へすも心のうつぬやめ服眼をぬへ一途をあらんを欲
しのだみて其譯を訓ふ事ぞ是程大切なり

夫ハ父母の舅姑の心我取失くも仕とあひのあゝ氣
ふ入るにまじり事ありといふ也朝夕乃起卧する食事を
あらそ又ハみこまの髪かむ湯あむるをたゞめこて万の
お氣成ぐよりやういふ事にて意ふけやうふせむがぬ事
ありそれとも物ハ恩情に心より遠に離れぬ為ふ事ある
が却て其恩もふたれりる形何う又やを怨むるぬといふ
理をまてあやが加つてまじり事ぞ破きて義ふちうを
有る夫の宜しといひて氣ふ入るも何處り舅姑の意なかるぬ
おとめハ是家治らぬふより終ハ夫も不孝ふあらうなり
が義の理道をまじりて我志す義を破くといふものぞ叔

叔妹之心復不可失也皆莫知叔妹之不可失而不
能求之以求親其蔽也哉自非聖人鮮能無過故顏
子貴於能改仲尼嘉其不貳而况婦人者也雖以賢
女之行聰哲之性其能備乎是故室人和則謗掩外
內離則惡揚此必然之勢也易曰二人同心其利斷
金同心之言其臭如蘭此之謂也夫嫂妹者體敵而
尊恩疏而義親若淑媛謙順之人則能依義以篤好
崇恩以結援使徽美顯章而瑕過隱塞舅姑矜善而
夫主嘉美聲譽曜于邑鄰休光延於父母若夫蠢愚
之人於嫂則託名以自高於妹則因寵以驕盈驕盈

既施何和之有恩義既乖何譽之臻是以美隱而過
宣姑忿而夫愠毀譽布於中外耻辱集于厥身進增
父母之羞退益君子之累斯乃榮辱之本而顯否之
基也可不慎哉然求叔妹之心固莫尚於謙順矣謙
則德之柄順則婦之行凡斯二者足以和矣詩云在
彼無惡在此無射其斯之謂也

婦の嫁娶一々我身成夫ふまゝとおもはれ意めけし氣入
まの舅姑の吾身をいづりつゝみ憐れ給ふ故おなのつら
夫を思ふと思ひ付くも又舅姑は吾身をいづりつゝ
いづれかまゝ乃弟やいふとの兄弟ふまゝと人々の常ふ

いふ事でも聖人かも知れぬ所を夫故孔子もおほめをされ
て仕えあるの過と兼て付とありの間も捨棄せし直改て二度
と改め改めりてそめ者ハ顔淵なりと仰せられしを是ハ
男の事も亞聖とて聖人も亞ぐ程不格別めされ人々此
通るある事にて況や女ハ身ハ心ハ遠の仕えあるの過ある事
いふ事でも古昔より賢女といふ事ハ生質發明にて道理
をよき辨へ婦人ハ修身乃行をそとて一と十まで何も
かもしと形ハ乃多備る程ハ中とてぬる事とてよ
りて室人とて一家内の近く親友人とも中とてうちあはれ
睦みられ少の仕えあるの過ハ瑕とてかかれぬ事とて外に洩

聞えぬ故もあつてあつてあつて評判が形ハ夫ゆゑの家眷を
はまらうとて近親族あるも互ハ心とて離れて親との
らぬ事とてあつてあつてあつて世間とてあつてあつて
が是とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
易經とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
物事をとり行ひさう時ハ其き味のよき味かたて金
の積り堅實物ハ至極あるもまた切りあつて程の力あり
二人ハ心をむつちあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
く賞とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

と有る互ふものや、此奥底に耽りて、もろくあること、つゝ釋えき
易經の此二箇條にも有る通りぞ。夫嫂といふは、夫の姉あねと
あは兄あによ、妹いもうとといふは、いとすまじき事、兄弟けいていちどよく皆小志こしと
いふ處より人故其位々吾身も同じ秘して下眼みんらぬ
そふと思ひあり、恩愛の血統ちゆうたうといふもと他人とていれ
ど義理合ふ才なり。とてまほば、又兄弟乃おと近くま
ふみの有るものを叔其人との互に淑媛謙順とて心あてのよう
やうなふ慮さうく自身をむく一人をせむ我意をまげ人
につぎまゐるふ心にけけん人とも有あらば兄弟も同じ程の義
理に合の中ねればこそ親しみ成何様く深切なり。血脈と

ちこれと血をうけ有るも猶更たびぬわすれ情合を
 めも厚くして援を結ぶと那ー合力なりやなり形もさう
 まればよき事なるをいふ事目め立ち少くは要知事や仕
 事おなじ聊乃瑕からけぬさるる氣が流ぬやに成る故舅姑
 もおのづから新婦に心だてさう物毎ふ氣のとて申さん
 のあゝぬよき婦あつても可愛うぬえぐも憐れ給ふふあ
 程ふ良人を家内け睦く々父母を喜び給ふを見たりと
 とけふたのちも心よる中合もこれとわづらふとあな
 其家内け睦く和ふあやまの自然と親族と鄰と
 聞えだん々世間け人をうさうさといふこの新婦はこととに

恥故とせよ嘲りやれまの父母の羞を増又つりま
 家事が治ぬや妻を去り返りしもせんあやけな
 らしと家内を教ふの行届ぬなと良人の名をも世間
 てとけならふ言ひも累を益さ事あるを斯の直に
 海も身も榮ゆ又やめれどかめを受ると二の物
 乃分處の境目と世との人ふすいとも悪くそら
 の基をれ必きつと身を清く心を配り骨折折れぬ
 事どもとてふさうとあはれ心を求め尋て吾人と
 くのけきわやふさる仕方固り我身を辱る人
 たるを我意を立べん命はさるる謙順といふもの

又添くつるもの此妙なる那其謙といふ我身を
 去へくあま人を貴む婦人よ行の徳といふ柄や
 ありやある物あり本然に順といふ我量見たを
 ずんめはあまの婦人持前のけいけい中の第一
 おもき節ある此二のもののふさうとや其外家内を
 親しみ睦くするの道すなり真實ふけけ行ふ此の物
 が何事あるあれぬなり詩經といふ書ふる彼ふつても
 まれ思ふ思ふも此にあつても厭ふもいふれども向
 もよく思ふ思ふも此にあつても厭ふもいふれども向
 をさるる此女誠の箇條のさる守り行ふもいふる人

一畢竟さねの人よりよくさるる皆我身乃行とらへ盡さ
ぬ處のある故とてまづく身成りと見く深く清くみは
とむる一何ふり一と

嘉永五年九月あつむ末孫女の子亮兒へをくはて
後の漢乃代めて帝より曹大家と稱けしき賢婦班
姫作より女誡を俚言あてて松泉倉次重約みだ
ら筆を執るあむ

